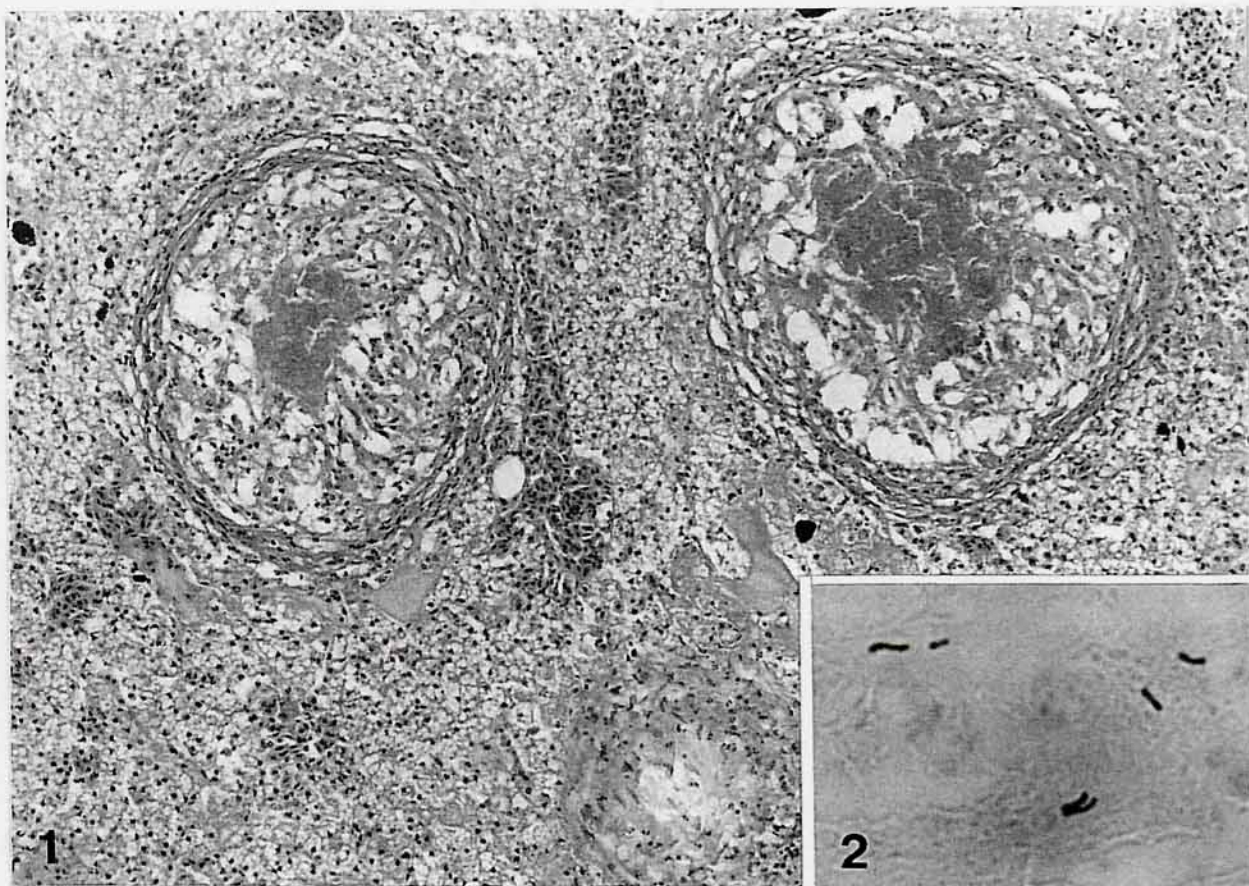


ヒョウモントカゲモドキの肝臓

東京農工大学農学部家畜病理学教室・草津熱帯園出題 第37回獣医病理学研修会標本No.705



動物：ヒョウモントカゲモドキ(は虫類, トカゲ亜目, ヤモリ科, Leopard gecko, *Eublepharis macularius*) 雄, 8歳。

臨床事項：1995年9月17日頃より食欲低下し, 時折, 体をひねって苦悶状態を呈した。同9月22, 23日の両日, 補液, 抗生物質, ステロイド剤投与による治療するが, 9月25日治療の効なく斃死。

肉眼所見：肝の実質はもろく, 淡赤色から灰褐色。肝表面には限界不明瞭な灰白色点が数個, 断面は細顆粒状を呈する。肺は赤色, 明瞭な白色結節(径1mm)多数あり, 肝のものより大きい。脾臓にも白点密発。腎臓に白点散発。

病理組織学的所見：肝臓には繊細ではあるが, 膠原線維性の被膜で囲まれた円形の病巣が多発していた(写真1)。被膜内部には疎に分布する類上皮細胞様の大食細胞および中心部には不完全な乾酪壊死巣あ

るいは空隙が見られ, 多核巨細胞は極めて希に観察されるのみで, ラングハンス型巨細胞は見られなかった。肝実質細胞はびまん性に脂肪滴を持っており顕著な脂肪化の所見を呈していた。また, 類洞あるいは間質にメラニン色素を持った細胞が時に小集団を形成し存在していた(漂白剤で色素を失う)。肝実質に見られたと同様の結節性病巣は腎臓, 肺, 脾臓および数は少なかったが体腔内脂肪組織内にも観察された。これらすべての病巣にはZiehl-Neelsen染色により, カルボール・フクシンの色素をとる陽性桿菌が観察された(写真2)。両生類およびは虫類にもいくつかのマイコバクテリウム感染症が知られているが, 今回菌を同定することはできなかった。今後, 公衆衛生上注目することが必要である。

診断：ヒョウモントカゲモドキの肝臓におけるマイコバクテリウム感染による多中心性肉芽腫性炎。